

文学博士山田憲太郎君の「東亜香料史研究」に対する

授賞審査要旨

山田憲太郎君は過去四〇年にわたって、東アジアの香料史、香料の東西伝播の歴史を研究してきたが、本書（昭和五年出版）は著者自身が述べているように、その研究の集成であり精粹である。

全編は三部に分かれ、第一部は「香料薬品を中心とする南海貿易の最盛期に撰述された『諸蕃志』の香料の研究」、第二部は「日本沈香志」、第三部は「肉桂史の研究」と題されている。著者が最も力を注いだのは第一部で、全体の七割以上の分量を占めている。

第一部は全一〇章からなる。宝慶元年（西暦二二三五）の自序がある趙汝适の『諸蕃志』巻下「志物」には四七の貿易品目が載せられていて、その内容は香料二三品目、薬品八品目、その他一六品目となっているが、著者はこの香料二三品目をとりあげて、それぞれについて、前後の時代の東西各種の文献を渉猟し、原産地、原料としての動植物、名称、製法、交易の径路、貿易品としての性質や価格、消費者の嗜好や用途、などの各方面から考察を行っている。第一章では「竜腦」を取り扱い、竜腦樹の分布地ボルネオ・マレイ半島・スマトラにわたる産地の変遷を論じ、採集法・品種・値段・用途を考え、また十二世紀以後に天然竜腦の代用品として中国の樟腦が現われた経緯を説明している。第二章は「乳香と没薬」と題して、まずギリシャ・ローマの所伝を検討し、次いで中国では乳香を薰陸香ともい

つて、四・五世紀の頃にはインド産の加工乳香を指したらしいが、八世紀には純品のアラビヤ乳香が伝来して、後者が宋代には政府の専売品とされ、貿易収入の大部分が乳香によることとなった事情を述べ、没薬については、あまり珍重されなかったと認めている。第三章は「安息香と金顔香」で、この芳香性樹脂が中国で四世紀から安息香と呼ばれた理由を考え、後には南海のベンゾインが、シヤム産を金顔香、スマトラ産を安息香として区別されていたこと、また西方世界ではそれが後れて十四世紀以後に知られた事実などを指摘している。第四章は実体不明の樹脂系香料「篤耨香」、第五章は「蘇合香油」を取り扱う。著者は中国では蘇合として西アジアの真正ストラックスが知られていたほか、ビルマリストラックスも用いられたと考えている。第六章は「沈香・棧香・速暫香・黄熟香・生香」と題し、香木としての各種の沈香（ガルウッド）をまとめて叙述している。東アジアで香料として最も重要な焚香料（イセンス）は、大部分が沈香の類で、種々の名称があり、迦闌香・棋楠香は黒い上質のものと認められるが、著者はこれらの名称、中国西南部から東南アジアにわたるその産地、沈香を他の香と混ぜる合香その他について詳述している。第八章は「胡椒」で、その産地と伝来、中国で十三・四世紀に莫大な量が輸入されて、著者のいう「胡椒時代」が出現したことなどが論じられている。第九章は「竜涎香」と題し、この抹香鯨の分泌物がインド洋方面、アラビヤ・東アフリカなどに産出し、特にアラビヤ人の間で珍重され、中国人はイスラム商人の手を通じてこれを入手した事実を述べている。第十章は「雑纂」として、(一)梔子花、(二)薔薇水、(三)檀香、(四)丁香・肉荳蔻・白荳蔻、(五)華澄茄、(六)腦腦臍について解説・考証を行っている。そして著者は結語として、上記の香料を焚香料・化粧料・香辛料に分類し、化粧料の少ないこと、薬物とされたものが多いことに注意し、肉桂や麝香は重要であるが、中国の国内や隣接地

帯で入手できるので、南海の貿易品とはなっていないことを指摘し、また諸蕃志の記事の典拠について論述している。

第二部(全六章)は日本における沈香の使用を歴史的に辿ったもので、六世紀末にそれが仏教と共に伝えられ、はじめは焼香供養に用いられていたが、十世紀頃から佳香を楽しむ方法が発展し、また香料類を調査して薫物を作り季節感を加えるようになり、十四世紀の頃から香道が生まれ、沈香の品質の区別や匂いの区分が発達し、中国の系統をひきながら日本で独自の展開を示したことを指摘している。

第三部(全二章)は肉桂を取り扱い、古代オリエント・ギリシャ・ローマで用いられたシナモンとカッシアは、インド・東南アジアの肉桂とは別のものであること、「シナの木(或は樹皮)」を意味するペルシャ語の *dar-sini*, アラビヤ語の *dar-sini* は中国から輸入されたものではなくて、インド肉桂を指したと推論している。

本書で取扱っている香料の研究は、東西の各種各時代の文献を扱う必要がある、産物の名称や産地の比定など未解決の問題がなお少なくないが、山田君の研究によって、東アジアの香料に関する文献と産物の実体とを併せた溯源史的研究は大きな進歩をみたもので、本書の学界に対する貢献を重視しなければならない。